

EMOTION NOVEL

written by HADEYA

1

ブレイキング・ニュースが報じられたのが、朝早く。何て事ない日曜日の朝だった。
何でも彗星の破片が地球に衝突するとの事。

——そして地球は滅んだ。

2

歩く。瓦礫だらけの住宅街を。見るも無残な、その光景。
彗星の衝突は収まった。子供たちは亡くなったに違いない。別れた妻も死んだろう。

みんな、死んだ。みんな……。

俺だけが助かった。そして、俺は——

立ち止まった。周囲を眺める。目の前に広がっているのは滅んだ地球。

「……酷いな」

眩かずにいられなかった。

運命は過酷だ。俺たち人類が築き上げた文明は跡形もなく滅んでいる。弛まぬ努力で築き上げた功績は見る影もない。

「馬鹿野郎……」

拳を握り締めた。ブツけようのない怒りが込み上げる。馬鹿野郎！——天に向かって叫んだ。

叫びが虚しく響き、静寂に変わる。思わず、その場に泣き崩れた。

*

妻は笑顔だ。その笑顔が忘れられない。

俺の感情に小さな炎が灯る。小さな小さな炎が灯る。

幸せの日々——今となっては懐かしい。

セピア調の〈記憶〉は徐々にフェイドアウトして行く。妻の愛が薄れて行く……。

台所から彼女が戻った。焼き立てのハムエッグが置かれた皿を手に。

「今日の朝食は——」

その時、ブレイキング・ニュースが報じられた。テレビに映る大統領の口調は物静かだった。

「人類は今日、フィナーレを迎える。地球は今日——」

*

「———終焉を迎える」

リモコンでテレビのボリュームを上げた。ドカン！ 轟音と共に天井の一部が崩れた。

妻の手を取り、俺は無我夢中で外に飛び出た。そこかしこで隕石の破片が降り注いでいる。

抱いている妻が痙攣する。過呼吸に陥ったのだ。あるいは小さな破片が後頭部に直撃したか。

手がヌルッとして、右掌を見た———血塗れの掌を。妻を揺さぶる。どれだけ揺さぶっても反応がない。

叫んだ。腹の底から叫んだ。

叫びが空しく響き、静寂に変わる。思わず、その場に泣き崩れた。

嘘のような静けさの中、涙、枯れるまで泣き続けた。

色褪せたフィルムが徐々に脳内にフェイドインする。妻の笑顔を見る。

至福の笑顔は快晴の空の下、輝きに満ちている。

余りの美しさに俺は〈神〉を感じる。至る所に———

「誰か助けて！」

女性の大声がした。涙を拭い、俺は救助へ駆け付けた。(了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872